

令和2年度 学校評価総括表

五條市立五條東小学校

		あかるく やさしく たくましく ー自ら学び 夢に向かってがんばる子の育成ー				総合評価	
運営方針		○強い使命感をもった教職員集団で、子どもたちの「社会を生き抜く力」を育てる。 ○保護者・地域と学校が双方向で協力し合える学校づくりを通して地域の人々から愛され信頼される学校を目指す。				B	
令和元年度の成果と課題		本年度の重点目標		具体的目標			
○交流を重視した授業づくりに取り組んだ結果、学習に向かう姿勢が高まり、自他の考えの深まりを実感する児童が増えている。 ○自主学習が定着し、児童の自ら課題を見付ける力が身につけてきている。また、計画的に家庭学習に取り組む児童も増えてきている。 ○学校司書との連携により、読書に親しむ機会をより多く設定し、読書環境の整備を推進することができた。 ○エンカウンターやストレスマネジメントの取組により、児童の自尊感情の高揚につながった。 ○系統だったふるさと学習の推進を図ることができ、その結果、児童の自分のふるさとを自慢したいという思いが高めることができた。 ●学習意欲の高まりを土台として既習事項の定着を一層図り、学力の2極化の解消を引き続き進めていく必要がある。 ●学校司書との連携により、読書環境の整備が進んだ一方、家庭での読書習慣の定着が課題である。 ●挨拶についてはアンケート結果と実際の児童の姿に乖離が見られる。自ら進んで気持ちの良い挨拶ができる児童の育成に引き続き取り組む必要がある。 ●統合1年目となるが、保護者や地域から信頼を得られるよう、これまで築いてきた組織の強みを引き継ぎ、確かな力の育成とふるさと学習の推進に一層力を注いでいく必要がある。		◎主体的に学ぶ力をさらに向上させる。		○対話と協働(交流)を通して、深い学びにつなげる。 ○確かな学力を育むため、児童が主体的に学ぶ授業づくりの研究を一層推進する。			
		◎自分や地域の良さを意識し、思いやりの心を育む。		○いつでもどこでも進んで気持ちよい挨拶を交わし、他者との関わりを通して自分も他者も大切にすることができる児童を育成する。 ○ふるさと学習の取組をさらに充実させ、ふるさとに学び、ふるさとを愛する思いを育てる。			
		◎心身の健康増進と運動能力を向上させる。		○自ら進んで基本的な生活習慣を身に付けようとする意識を高める。 ○自分の課題を明確にし、課題に応じた活動を計画的に取り入れて、体力や運動能力の向上に根気よく取り組むことができる。			
評価項目	具体的目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
主体的に学ぶ力をさらに向上させる。	I 対話と協働(交流)を通して、深い学びにつなげる。	体験的・探究的な授業推進を通して、児童の学習意欲や論理的な思考力を高めるとともに、学習内容の定着を反復練習や交流を意図的に取り入れることで、学力の向上を目指す。標準調査全国平均以上を目指す。	B	B	・探究的な学習の推進には、一定の成果があった。多くを学ぶ一年となった。 ・市内の平均は上回っているが、全国平均を上回るには至っていない。 ・自分の考えを形成できていることが、自信をもって授業に臨み、授業や友だちと交流することが楽しいと感じる児童の90%達成に繋がった。	・算数や漢字など、定期的に振り返る時間を設ける。(授業の初め等)	・「コロナ禍によってできなかった」ではなく、何ができたかを考え、成果を上げている。数値目標をきちんと設定して取り組んでいることで、客観的な分析ができている。 ・思考ツールを活用した学びは、子どもたちが将来社会に出たときに具体的に活用できる力になる。
	II 確かな学力を育むため、児童が主体的に学ぶ授業づくりの研究を一層推進する。	家庭と連携して家庭での学習習慣を確立させ、中学校区との共通理解も図りながら、自主学習の一層の充実に取り組む。自己評価で自ら課題を見つけ、自主的な学習に取り組めた児童90%達成を維持する。 図書を活用した学習や、読書の楽しさを味わう機会を積極的に作り、意欲的に読書活動に取り組む児童を育てる。自己評価で読書をするのが好きだという児童80%以上を目指す。	B	B	・自主勉強交流等を学級内や異学年間で実施したことは、自主学習の一層の充実につながった。 ・自主的な学習は89%に留まっている。 ・読書が楽しいと感じる児童86% 目標達成 ・個人差・学年差あり、学校全体更なる向上を。 ・朝読の時間がなくなったか、月曜に20分間読書の時間を確保することで、意欲的に読書することができた。 ・毎週の図書室利用は定着していない。 ・まとまった読書時間が確保できないため、20分読書ができる児童はやや少ない。	・小中連携をより強化し、中学校を見据えた学習習慣の定着を図る。高学年においては、中学生の話聞くなどの機会は方策の一つ。 ・毎週本を持ち帰る。 ・「図書室ボード」で毎週本を借りに行くきっかけを作る。 ・図書室担当表を作り、各学年に週1時間の図書室利用の配当をする。 ・全体の取組を継続する。	・深い研究や指導の工夫が積極的に行われていることが分かった。多大な時間的負担がかかっているのではないかと懸念している。無理のないよう、効率的に時間を活用して取り組んで欲しい。
自分や地域の良さを意識し、思いやりの心を育む。	III いつでもどこでも進んで気持ちよい挨拶を交わし、他者との関わりを通して自分も他者も大切にすることができる児童を育成する。	自主的で気持ちのよい挨拶とはどのようなものか、体験的に学び、考える場を設け、誰とでも気持ちよく繋がりが合える学校環境づくりを推進する。実際の姿を伴う自主的な挨拶80%の達成率を目指す。 エンカウンターを取り入れた学級活動や、異学年間の交流を積極的に取り入れた活動等を通して、自尊・他者感情や、人権意識の高い集団づくりに取り組み、なかまの良さを認める児童85%以上を達成する。	B	B	・レベル表やあいさつ運動、学級指導等で、挨拶の声が大きくなった。取組に一定の成果があった。 ・いつでも誰にでもできる児童は限られている。 ・コロナ禍ではあったが、工夫しながらエンカウンターや異学年交流等で仲間作りに取り組めた。しかし、85%以上には達していない。 ・今後、人権意識を高める取組を進めていく。	・全校集会等でモデル提示できない分、タブレットを活用し、動画でモデルを示す。 ・人権意識の向上に向け、引き続き教員間や外部と連携して指導していく。	・日々、子どもたちの様子を見守る中で、挨拶ができるようになる等、成長がよくわかった。
	IV ふるさと学習の取組をさらに充実させ、ふるさとに学び、ふるさとを愛する思いを育てる。	学校統合により校区が広がったことから、各校のこれまでの積み上げをベースとして新たなふるさと学習計画づくりに取り組み、中学校区全体で共有できるような体系的なふるさと学習の確立を目指す。 ふるさと学習推進や、地域ボランティアも方々との日々の関わりによって、児童が地域との繋がりを実感し、ふるさとを愛し、誇りに思う児童80%以上を目指す。	A	A	必要感のある課題設定のもとでふるさと学習を行ったことで、校区や五條市のことを知りたいと思う児童の割合が94%に達した。統合一年目とは思えないふるさと学習の体系が整えられた。また、特色ある学校づくり事業では、6年生を中心に中学校区で連携しながら地域学習を進めることができた。 各学年で地域の人々やものとの繋がりができた。ふるさとを自慢したいと思ったと答えた児童の割合が84%で、一学期から12%上昇した。学習を通して、ふるさとの良い魅力に気づき、誇りに思う児童が増えたと考えられる。	今年度のふるさと学習の記録を残すとともに、年間計画を見直し、来年度に向けての改善を行っていく。また、地域ボランティアの方々のつながりを継続していく。	・旧阿太校区ではスクールバスを活用するようになったため、地元で子どもたちの姿が見えにくくなった。学校での様子を地域に知らせたい。
心身の健康増進と運動能力を向上させる。	V 自ら進んで基本的な生活習慣を身に付けようとする意識を高める。	基本的な生活習慣を確立するため、生活調べを活用して自分の生活習慣を振り返る機会を繰り返し持たせ、保護者の積極的な協力を得ながら、達成率90%以上を目指す。 児童の気になる様子について全職員が共通理解をする機会を定期的(毎週終礼時)に持ち、組織的な対応ができる体制をつくる。学校が楽しいと思う児童90%以上を目指す。	B	B	・生活調べでは、学校全体で生活習慣を向上することができた。 ・ゲームとスマホ、寝る時間の改善が必要。 ・全教員が共通理解をしながら組織的な対応をすることができた。 ・学校が楽しいと思う児童90%を達成することができた。	家庭への呼びかけ、ネットの出席授業などの実施。	・子どもたちが、自ら課題に向かってチャレンジしようとする仕組がよく考えられている。社会性や人間性がしっかりと育まれている。
	VI 自分の課題を明確にし、課題に応じた活動を計画的に取り入れて、体力や運動能力の向上に根気よく取り組むことができる。	体力測定の結果等をもとに児童の体力・運動能力の課題を明確にし、系統立った体力・運動能力向上に取り組む。その成果を再計測(ランクアップチャレンジ会)で数値化し、各学年5種目以上で全国平均を上回ることを目指す。 ハッスルキッズや外遊びチャレンジの実施など、運動能力や興味・関心に沿った課題を個々に持たせ、数値目標を設定して向上に向けて意欲を持って継続的に運動に取り組める場や機会をつくる。運動が好きだという児童90%以上を目指す。	B	A	コロナ禍の中で、内容・取り組み方の工夫し、3~6年生まで全種目取り組むことができた。測定結果がまだ返ってきていないので課題の把握は未実施だが、今年の結果が東小の課題把握にとって重要なものであるため、結果が分かり次第分析を行う予定。 進んで運動をする児童は、83%にとどまったが、体育員会中心にハッスルキッズを実施し、全校児童が運動に親しむ場の設定ができた。外遊びをしている児童がアンケート結果よりも大変多く見られた。外遊びチャレンジも、ハッスルキッズと運動させながら、各学年で実施することができた。	特別な状況下でも取り組める運動方法を探り、検討・実施していく。体力テストの結果分析で分かった課題を明確にし、来年度の体力向上の計画につなげる。今年度取り組んだハッスルキッズの内容や体育での工夫も来年度に引き継いでいく。	
今年度の成果と次年度への課題		<成果> ・探究的な学習課題の設定や、思考ツールの活用により、自他の考えをつないで問題解決に取り組もうとする対話的と協働の学びを進めていくことができた。 ・挨拶運動の取組によって、大きな声で挨拶ができる児童が増えてきた。 ・統合によって広がった校区に対応した新たなふるさと学習の体系を整え、児童が意欲的に活動する取組を進めることができた。 ・異学年交流等を取り入れた外遊び活動を実施することで、運動を積極的に楽しむ児童が増えている。			<課題> ・基礎基本の力を定着させるため、計算や漢字等、既習事項を振り返る時間を設ける。 ・小中一貫教育を見据え、中学校区連携のもとに教育活動の再構成や家庭学習習慣の定着を図る。 ・読書習慣に個人・学年間の差があるので、「図書室ボード」等を活用し、全体として取り組んでいく。 ・不登校や学校不適応傾向解消のため、集団づくりや外部機関との組織的連携を一層図っていく。 ・地域ボランティアの方々とのつながりを継続し、ふるさと学習年間計画を改善していく。 ・「スマホ・ゲームに費やす時間」「寝る時間」等、生活調べの結果が芳しくなかった項目について、家庭の協力を得ながら底上げを図っていく。 ・新しい生活様式に対応した運動の方法について検討し、実施していく。		